

(元仙台市建設局長)

明治30年9月10日、福島県双葉郡双葉町に生まれる。高倉君とは大正14年4月より終戦の昭和20年8月15日まで朝鮮總督府土木課に勤務、全11月一緒に内地に引きあげた。昭和23年9月仙台市で再会した。私は引あげ後母校のすすめで仙台市の戦災復興事業に関係し、彼は總理府特別調達局の仙台局長として赴任してきた。昭和25年末頃になったのでこれ幸いと仙台市に来てもらい、土地区画整理の精算課長になって貰った。戦災都市は全国で150もあり事業施行方策は土地区画整理なので熟練者は全体に不足しているときなので常に心強く思った。しかし本格的な精算事務に至るまでに至っていなかったので訴訟・訴願その他苦情処理もやって貰ったがその中に仙台駅前整理に関して「ビジネスセンター」問題がおこった。

仙台駅については駅の広場及び隣接する住民の土地も合せて2,000坪が米軍に接収されたのである。所が昭和27年中頃には返還するという内報があったので返還後は如何にすべきかについて検討した。鉄道用地は広場にすることは当然であるが民有地1000坪については所有者18人もおり戦前の使用状況は木造旅館又、他は土産店雑貨店などでのままの復興は仙台の玄関口としてふさしからぬものであるから岡崎市長はこの土地全体を基礎として地下1地上10階の大ビルディングを建設して、地下には仙台駅を引き込み（仙台一名巻線）更にバスセンター

を設置し、地上には旅館ホテル、商工物産展示場、宮城県の観光案内場などいわゆる仙台ビジネスセンターを建設しようという案を発表した。その内に反対者も表はれ市会でも野党がらのきびしい質問などが出て来て難しくなって来た。市長も改選時期も迫って来たので遂に幻にせざるを得なかった。しかし小規模ながらも合同のビルも出来たのは幸いといべきであるが実はこの発想は外ならぬ高倉君であった。今日の市街地再開発事業の先端を行うものであり誠に残念であった。

次に区画整理の精算は一地区とに計算することにした。しかし整理前8000筆整理後5000筆合せて13000筆の評可指数の計算は容易ならざるものであった。高倉課長はすべての路線価を決定して計算の段階において退職し、石川課長に変わったが石川君も計算は小型計算器を利用しても容易でないと考え電気計算協会に依頼した。協会も初めてのこととて約1年半位かかった。一万3千筆の計算は1時間でプリントになって出て来たという。先端技術の威力には驚いたようである。高倉君は昭和48年11月に亡くなられた。誠に哀悼の至りであるがその終末処理の功績は永く記録に残るであろう。

